

松岡五兄弟の系譜——祖母松岡小鶴を中心として——

山崎 みどり

(一) はじめに

松岡五兄弟といっても、播磨地方以外の人には、あまりなじみがない呼び名かもしれない。しかし、柳田国男と聞いてその名を知らない人は恐らくまずあるまい。松岡五兄弟は、その柳田国男を含む五人の兄弟を指す。

そしてこの播磨を代表する文化人、“柳田国男・松岡鼎・井上通泰・松岡映丘・松岡静雄”兄弟の父松岡約斎もまた漢学・国学に通じた学者であり、『約斎律詩』という漢詩集を残している。約斎は、母小鶴のきびしい教育によって、幼い時から漢学・神道に通じ、後に新政府への不信感からノイローゼになったといわれる。この約斎の面影は、島崎藤村『夜明け明』の青山半蔵と二重移しになるところがある^{〔注〕}。柳田国男と島崎藤村には交友があったが、あるいはこの約斎の生涯について、柳田国男を通じて伝え聞くところがあり人物造型に影響を与えたかもしれない。

またこの約斎にきびしい教育を施したのは、当時まだ珍しい女医でもあった先述の母松岡小鶴であった。現在その漢詩文集『^{〔注〕}小鶴女史詩稿』が残っている。

本稿は、父約斎を経て孫の五兄弟にまで文化的遺産、精神的なバックグラウンドとして影響を与え続けたこの祖母の生涯と業績を紹介するものである。

播磨地域は、古代から京の先進文化を採り入れつつ独自の発展を遂げてきた地域である。現代にまで引き継がれるこの地域の文化レベルの高さは、この地域で活躍したこのような文人たちの学術研究と教育活動の成果であり集積であるともいえるだろう。

(二) 松岡五兄弟

先ず松岡五兄弟について簡単にその経歴を紹介しておこう。松岡五兄弟は、松岡鼎、井上通泰、柳田国男、松岡静雄、松岡映丘の五人を指す。この他に二男俊次、四男芳江、五男友治があり、柳田国男は実は六男であったが、三人の兄は早世している。

〔松岡鼎〕一八六〇—一九三四（万延元—昭和九）

医師として「医学研究会」をおこなすなど、地域の衛生改革を推進した。帝国大学医科大学別科医学科を卒業、茨城県北相馬郡布川町（現利根町布川）で医院を開業。後、千葉県南相馬郡布佐町（現我孫子市布佐）に居を移し、生涯医師として過した。また東葛飾郡会議員、布佐町長も勤めた。次兄井上通泰の孫泰子の談によれば、「大変優しく、そばにいと体とのシンまで暖まるような方だった」という人柄であった。生涯播磨に居ることはなかったが、播州のことは常に頭にあり、播州言葉で「さて」を「こうつと」と言ったという。

〔井上通泰〕一八六六—一九四一（慶応二—昭和一六）

歌人、国文学者として芸術院会員をつとめた。帝国大学医科大学を卒業して眼科医として勤める傍ら作歌に励み、森鷗外らと歌会「常磐会」を結成し、御歌所寄人、宮中顧問官の要職をつとめた。この兄のことを^{（注3）}柳田国男は孝夫人に「井上の兄には親に仕えるようにするように」と日頃から話していたという。

〔松岡静雄〕一八七八—一九三六（明治一一—昭和一一）

松岡静雄は、海軍兵学校を首席で卒業して海軍大佐にまでなった。病により退役し、学問に没頭、民族学、言語学、国学などの著書を多く残している。しかし柳田国男のこの弟に対する評価はかなり手きびしく、^{（注4）}「奇抜なだけでシステムも何もたっていないかった。その他の出版物も専門の学者からは甚だ尊敬せられない本ばかりだった」と言っている。

〔松岡映丘（輝夫）〕一八八一—一九三五（明治一四—昭和一〇）

日本画家として数々の名作を残した。東京美術学校日本画科を首席で卒業、東京美術学校の教授となり、門下からは多くの優れた作家を輩出している。彼が幼い頃、父約斎は、お話に絵をつけて絵話にくれたと述べている。^{（注5）}

(映丘談)。それが自身でも述べるように彼の画家としての才能を目覚めさせたようだ。

(柳田国男) 一八七五—一九六二(明治八—昭和三七)

いうまでもなく民族学を確立し、テキストのいくつかは「世界の古典」とまで称される日本を代表する研究者の一人である。兄の井上通泰もこの弟については、「兄弟の中でも一番伶俐」だったと評している。

以上のようにそれぞれに秀れた、しかも多様な功績を遺した五兄弟であるが、松岡映丘が残した言葉のように、その才能のルーツは父母や祖父母などの前の世代にあった。例えば井上通泰も日頃から「自分の家は五代六代勉強しているから、五、六時間本を読んでも欠伸一つ出ない。しかし突然一人出た者は、勉強の姿勢がちがう。どこかでそれがあらわれるものである」と話していたという。

(三) 曾祖父母く祖父母

「松岡」という姓は、松の群立つ岡というおそらく日本列島どこにいてもみられる風景からつけられたと考えられる。『姓氏家系大辞典』をみると、松岡姓は、古代から近世までの記録類に記載される限りでも、三十ヶ国に出現し、それぞれが出自を異にするらしい。その中でも、播磨一円の松岡姓は、おおかたが赤松氏一族であるという。いわゆる村上源氏の系統で赤松四郎茂行を祖とする。この姓は、播磨から美作国にも広がっている久米郡の名族である。もっとも松岡家の家系図として今見ることのできるのは、隠居分家した松岡勘四郎(一七七七年(安永六)没)からである。

柳田国男は「祖先のこと」という文章の中で、「私の家、松岡家というのは非常に変わった家契文すぢである」と言う。彼から言うなら曾祖母の母にあたる森氏まっは、日蓮宗で、本来代々天台宗である松岡家に自由結婚で入った。この当時他宗との結婚は許されていなかったという。

たまたま福崎町の山崎という所にある妙法寺という法華宗の寺に、蟄居を命ぜられた僧侶が来て、周囲の目ぼしい檀徒を自分の寺に引き入れた。その時、森氏まっは、自分の息子の左仲を無理に法華宗門に引き入れた。この左仲は医者をしており、「顔にコブがあったため人に会うのを嫌い、往診を断わるので流行らない人」だったというが、別

の記載では、「恬淡無欲仁愛の情が豊かで好学の志が篤かった」^(註10)という。音韻や絵図をよくし、数学をよくした。松岡家の本山は、本来妙徳山神積寺というやや格式の高い天台宗であったため、法華宗に宗旨変えた左仲の行動は問題となって本山から追放され、柳田国男の祖母となる娘小鶴をつれて京都へ引越した。小鶴は、ちょうど教育を受けなければいけない時期に何一つ教えられずに京都で幼児期を過し「京都で生活の資とした鹿の子紋り以外に家事のことは何も知らなかったということである」と記されている。

祖父の至(陶庵)と祖母の小鶴(小けん・自謙・縞衣)は、ともに養子・養女で、それぞれ祖父至は網干の中川家から、祖母小鶴は、川辺の中川氏から来ている。「祖先のこと」によると「網干の中川というのは川辺かわなべからの分家で、何代か前に中川善継というちょっとすぐれた蘭医が出ている。これが祖父の兄弟なわけである」という。直接血のつながりはないとはいえ、松岡家は、医師に關係の深い家系であったようである。

その後、松岡五兄弟に後々まで大きな影響を及ぼす祖母小鶴は、やがてこの夫を離縁するが、彼は生野で直継という家に入夫した。気概のある人で、生野騒動の黒幕となって檄文を起草したりしたという。

この養子・養女の夫婦には、柳田国男の父(一八三二・六・十二)となる一人息子賢次が生まれる。賢次は、明治維新後に操と改名、幼名は文、号は雪香と称したが後に約斎に変えた。本稿では、混乱を避けるために約斎に統一している。

四 祖母松岡小鶴

祖母松岡小鶴は、多くの漢詩文を残している。五兄弟の長兄松岡鼎は、『松岡小鶴女子遺稿』の序に、「松岡小鶴女子伝」を載せているが、松岡鼎家では、この遺稿を漢文の教科書同様に「練り返し読まされた」^(註11)というのである。

松岡鼎による「松岡小鶴女子伝」は、大正十一年八月に書かれた六四〇字ほどの文章である。ここまで述べてきたと重複する事柄は可能な限り除いて要約すると以下の如くである。その内容に従って、さらに詳述していこう。

- (一) 祖母の名は小鶴、通称小けん、晩年剃髪して自謙と称す。
- (二) 播磨の国神東郡辻川村の医師松岡左仲の長女、母は桂氏。小鶴二十六の時、揖東郡網干の人中川至名維恕を養子にして祖母にめあわせた。
- (三) 翌年六月一男(約斎)を生んだ。養父左仲と至は仲が悪く、小鶴三十三歳、約斎七歳の時、小鶴に相談なく至を追い出した。
- (四) 小鶴はその後再婚せず、独学で医学を学んで左仲と息子の面倒をみた。左仲は七十一歳で没。
- (五) 約斎は十三の時、加古郡安田村の医師梅谷左門に医学と儒学を学んだ。姫路藩の儒臣角田心蔵が小鶴の貞節と約斎の才能を認めて、仁寿山校、次に藩校好古堂に入って儒学を学べるよう計らった。
- (六) 小鶴は医者をやめて塾を開いた。
- (七) 明治六年十月十五日、死期を予告して亡くなった。享年六十八歳。
- (八) 小鶴は、儒教、仏教、詩歌、文章、書、算数を善くしたが、どれも独学であった。
- (九) 逸事として今に伝わる事も多いが、子孫が記録して残すにはふさわしくない。

以上について、原文は漢文で書かれている『小鶴女史遺稿』の自序(一八四四年十月(弘化元))によりさらに詳しく補足しよう。(三)の夫との離縁については、小鶴自身が「自序」の中に、父と夫との相性が悪かったこと、また後に手紙によって、夫が許しを請うてきたこと、その時に泣いて請願すればなんとかあったのに、自尊心が邪魔をしてそれができなかったことをいう。それは大きな罪であると自らを責めている。また充分に父親の供養ができなかったことも、もう一つの自分の大きな罪であると述べている。

(五)については、幼い我が子を遠く遊学させたことにより、どれほどつらく寂しい思いをしたかを述べている。小鶴の約斎への教育は、非常にきびしく、九歳の頃から毎日必ず詩一篇を作らせ、彼が十歳の頃には漢籍の白文を読むことができたほどであった。その我が子に送った漢文の手紙や詩文をまとめたのが『南望篇』と題した小冊子であることを述べる。

実はこの自序が評判となり、一八四五年八月(弘化二)姫路政庁は代官吉沢周平に命じ、小鶴を表彰させている。

柳田国男は、「祖母の父や夫に対する強い自省自戒の報償が計らずも子の操（筆者注 約斎のこと）に対する恩典の形で認められたということができよう。我が家にとっても誇るに足る一つの事件であった^{（作註）}」と感想を残している。

（六）の小鶴の塾については、『兵庫県教育史』（一九八一年 兵庫県教育会）「二、神崎郡寺子屋教育の実際」に詳しい記録がある。松岡塾は、田原村西田原字辻川にあり、万延元年（一八六〇年、小鶴五四歳）の創立、慶応二年（一八六六年、小鶴六〇歳）で閉鎖とある。辻川、井の口、北野、吉田、入反田、中島、宮脇、山崎等の地方から生徒が集まり、およそ一百名に及んだ。

教育の目標は普通国民教育にあって、父兄の口頭依頼により入塾させ、読書、習字、算術の教科を授け、使用教科書としては、四書五経、往来物（名頭、国尽、百姓往来、商売往来等）。午前中習字、午後は読書算術、月の一、六の日を休日とし、他は毎日八時間の修学であった。年中行事としては、毎月試験をしたこと、宮参りをしたことが記録として残っている。賞罰として成績に依り席次の昇降を行い、品行の悪い者は罰として晩留（居残りか？）させた。月謝等の規定はなく随意であったとある。また記録では、塾の代表者は松岡操（約斎）で、生徒数は男子五七名、女子二一名とある。一八六〇年は、桜田門外の変が起こり、世の中がいよいよ騒然としてきた時期だが、約斎は、一八五九年に二八歳でだけ（一八四〇年（天保元）生、二〇歳）と結婚している。一八六〇年より母の塾を手伝っていたと思われるが、その年に長男松岡鼎が誕生している。実父至が、天誅組の乱に呼応した「生野の変」で檄文を草したのは、その三年後（文久三年、一八六三年）である。

（七）に、「明治六年十月十五日^{あつめ}予死期を告げて没しき。享年実^{まこと}に六十八歳なり」とあるが、柳田国男は、祖母を「気性の烈しい婦人で、一生涯、片時も孝と貞とを忘れず^{おろそか}に暮したというわけで、死ぬ時も自ら證^{あかし}して孝貞烈女と云ったほどであった^{（作註）}」と評している。

（八）小鶴の学問は、独学であった。辻川という五十戸ほどの家しかない僻村に生まれてしかも前述のように養父左仲は京都に移り住み、何一つ教えられなかった、とはいうものの、一つには天稟であったのだろう。また丹波から津山への東西の街道と南北の生野街道との交差点「辻」であったという土地の特異性にもあったと考えられる。江戸時代という、農民にとって制約が多かった時代にも、ある程度の経済的余力があったとその当時の記録から読みとれる。小鶴が塾を開くことができたのもそのためであったろうし、また多くの見聞が行き交うことは、好奇心を大いに刺

激したことだろう。

また大庄屋三木家は、多くの蔵書を持っており、子供時代の柳田国男もこの書庫に自由に入出入りしていた。「私はそれらの蔵書を耽読した。―中略― いろ／＼な種類を含む蔵書で和漢の書籍間には草双紙類もあって読み放題に読んだのだが、私の雑学風の基礎はこの一年ばかりの間で形造られたやうに思う。」^(作註) というのが後年の彼の感想である。小鶴もまたこの三木家とは交遊があったことから、その恩恵に与ったものと思われる。また後に、この三木家の主人で学問で聞えた三木公達（通深）と論争を交じた文章が残っている。

小鶴は特に算数に長じていて、庫の扉がどうしても開かないのを算数で理づめに開けたという逸話も伝わっている。また「天が下の歌の数を知らぬ方法」を考案したという。三十一文字の仮名を並べてコンビネーションで計算すると数の限界がわかるとしたが、この事を柳田国男が物理学者であり随筆家としても有名な寺田寅彦に話したところ、「時が経つにつれて同じ歌でもイミが違ってくるから、コンビネーションの内容が増えてそんなことにはならない。歌の数は決まってしまうから勉強して作る方がいいよ」と一笑に付されたことを記している。^(作註) 小鶴にはある意味思ひこみの激しい所があったように思われる。

また辻川村は貧乏村で昔から墮胎が盛んに行われていたのを、人道に外れた所業だと説いてその悪風が熄んだと井上通泰が述べている。^(作註) 実際小鶴には「兎に与える書」が残っていてその中で男女の情欲についての戒めを説いているのだが、十四歳の約齋に説くには、内容がやや早すぎた感がある。

(九) 逸事として今に伝わる事も多いが、子孫が記録して残すにはふさわしくない、という言葉については、小鶴の残した詩文から、恐らくは次の「誓詞」に纏わる事件を指すのではないかと推測される。

誓詞 并序

頃日聞或伝余有穢行、乃賦一絶、質神明、以証其志、且以自誓、寧以文字鄙拙取嘲於大方、何忍以身之察察、受物之汶汶以忝所生乎、如所不信者、神明其罰之

莫説人能見肺肝

説う莫れ 人能く肺肝を見ると

誰知松柏不凋寒
秋霜磨操光如刃
世上衆魔安得干

誰か知らん松柏寒に凋しほざるを
秋霜 操を磨き 光刃の如し
世上の衆魔 安くんぞ干するを得ん

〔誓詞・序訳〕

先頃私に醜聞があるということを知り、それを聞いた。そこで私は絶句一首を賦し、神明に対して是非を明らかにし、志を明かにし、且つ自らこのように誓った。「文章が稚拙であると大方の人に潮けられた方がむしろずっとましだ。どうして潔らかな体を汚ないもので汚すことができようか。(筆者注「以身之察察、受物之汶汶」は『楚辞』「漁父辞」からの引用) もしもこの心を信じない者がいたら、神様どうぞその者を罰して下さい」

〔漢詩訳〕

人間は心の奥底まで見ることができるとは言っていけない。いったい誰が松柏のような堅い操をもった木は寒さにも枯れないと理解しているだろう。秋霜のきびしさに操は磨かれてまるで刀剣のような光を放っている。世の中のおびただしい魔物などに、この刃を防ぐことができようものか。

詩文からは恐らくは男性に関するいわれない醜聞に激怒した彼女の姿がひしひしと伝わってくる。子孫として記録に残すにしのびないというのは、そのあたりの事情を指すものと思われる。この激烈な詩文を前にしては、心ないうわさ話をしていた人々も口をつぐまざるを得なかったのではなからうか。いかにも一本筋を通していきさきよい小鶴の姿が目に見えよう詩文である。

(五) 小鶴の詩文

『小鶴女史詩稿』の中の一編を取り上げ、さらに当時の小鶴に対する評価について紹介をして終りたい。

小鶴は、堂々たる漢詩文を残しているが、また和歌も残している。たとえば「朝露回文」という作である。

つつみしを たまとしらつゆ はなにだに 名はゆづらじと またをしみつ

白露の美しさは花にもおとらないという意の歌を回文として遊びで作る余裕をみせている。

回文とは、もちろん上から読んでも下から読んでも同音になる文章である。小鶴は、実は漢詩でもこの回文を作っている。

宮怨回文

蕭蕭奈夜深

蕭蕭 夜深きを奈せん

露樹月摧金

露樹 月金を摧く

嬌面玉欄下

嬌面 玉欄の下

思遣一曲琴

思遣る 一曲の琴

(韻は深・金・琴)

〔訳〕

宮怨回文

もの寂しく更けていく深い夜をどうしたものでしょう。露に濡れた樹々に月光が碎けて金をちりばめたよう。あてやかな官女が一人玉の欄しの下で、思いをのせて琴を奏でる。

宮怨回文(反対から読んだもの)

琴曲一遣思

琴曲 ひとえに思いを遣る (全掲の詩の四句目を逆に詠む。以下同じ)

下欄玉面嬌

欄を下りて 玉面嬌なり

金飾月樹露
金飾 月樹の露
深夜奈蕭々
深夜 蕭々たるを奈せん

〔三句目は「松岡小鶴女史遺稿」では、「推」の字を「飾」に作る。意味は同じ「ふるう、ふるい」 韻は、嬌・蕭〕

〔訳〕

宮怨回文

琴の曲の音に、いちずに思いをこめる。欄を下りる玉のような宮女のあでやかさ 金のふるいでふるったような露が月夜の樹々に降りかかる。深い夜のもの寂しさを何としたものでしょう。

ただでさえ難しい漢詩の制作をこのような余興として軽々と作るところに、小鶴の能力の高さと余裕をみてとることができると言つてよい。

近在においては、評判であった小鶴であるが、それではその当時どれほどの名望があったのだろうか。『小鶴女史詩稿』に富山藩の儒者、岡田信之の跋文が残る。岡田信之は、江戸の昌平校に学び、藩校広徳館の教授として藩主の侍講の任に当たった人物である。

跋

此巻也女史示其令嗣之篇、居多無誦其詩、読其文可以想像其為人也、字句圓暢情致深遠、使人感嘆自不能已、況於其令嗣乎、若者贈竹台諸編則議論正確出人意表指顏坐丘阜、頃之儒生者豈得不避三命乎、嗚呼此巻也誠為儒生者之頂針、為人子之干城

慶応丙寅暮秋

富山藩吳陽岡田信之撰

字句の写しに誤りがあるのか意味不明の箇所もあるが、補える部分については補って読むと左記の如くである。

此卷や女史其の令嗣に示すところの篇なれば、居するもの多くはその詩を誦する無し。其の文を読まば以て其の人と為りを想像すべし。字句圓暢にして情深遠に致り、人をして感嘆自ら已む能ざらしむ。況んや其の令嗣においておや、若者（？）竹台に贈る諸編は則ち議論は正確にして人の意表に出で指顔（顧か？）坐丘阜（？）頃きりの儒生者、豈に三命（舎か？）を避（避か？）けざるを得んや、嗚呼此卷や誠に儒生者の頂針為り、人の子たる者の干城かんじょう為り

慶応丙寅暮秋

富山藩陽岡田信之撰

〔訳〕

この詩稿は、女子がその御令息に示したものであるから、多くの人が詩を読んでいるとはいえない（しかしながら）、その詩文を読めば、女史の人と為りが想像できる。字句はのびやかで円満、情も奥深く、読む人は感嘆せざるを得ないほどである。ましてや詩文を送られたご令息であるならなおさらのことであろう。また竹台に贈る諸編はというと、議論は正確で人の意表をつき（以下五字未解）、近頃の儒者など恐れてしりこみをせざるを得ない。嗚呼、この詩稿は誠に儒者たる者の戒め、人の子たる者の干たと城（守護するもの）である。

慶応二年（一八六六年）暮秋

富山藩呉陽（号）岡田信之撰

竹台というのは、第四章（八）の補足で触れた三木家の主人公逢（竹台）を指す。「与公逢論仏書」は、朱子学を信奉する辻川村の大庄屋七代目の若主人三木公逢（竹台）に対して、熱心な法華経信者であった小鶴が、仏教擁護の立場から論争を展開したものである。この文章のことは、柳田国男が「いま（読んで）なお興奮を覚えるほどの大文章」であると絶讃している。

松岡五兄弟の才能は、直接的には父約齋、また拔群に記憶力が良かったと伝わる母たけから受け継いだものではあ

る。だが、長男鼎が、漢文の教科書のように毎日子供に繰り返し読ませたという、この祖母の詩文集にみえる学識、文中に漲る気骨もまた五兄弟に大きな影響を及ぼし続けたと考えられる。

江戸後期、播磨では教育が非常に盛んで、藩校は県下に三十あったうちの十七が播磨にあった。寺子屋は四百四十八あり、県下の寺子屋のうちだいたい半分ぐらいは播磨地方が占めていたという。この地の文化レベルの高さは、このような土壌の上に育まれてきたものである。松岡五兄弟の活躍も、また少なからずこの地で活躍した文人たちの学問研究や教育活動の成果であり、集積でもあるともいえるだろう。

〈資料〉

- ① 『松岡小鶴女子遺稿』松岡鼎私家版（大正十一年十一月 杏林舎）
- ② 『小鶴女史詩稿』（『福崎町史』第四卷収録）
- ③ 松岡房夫『柳田国男・松岡家播磨での足跡』（一九九七年七月 藤書房）
- ④ 松岡房夫『柳田国男と「約斎律詩」』（一九九五年九月 藤書房）
- ⑤ 姫路文学館編『松岡五兄弟』（一九九二年 姫路文学館）
- ⑥ 『柳田國男全集』21「故郷七十年」（一九九七年十一月 筑摩書房）
- ⑦ 太田妙子『江戸時代の女性医師—稲井静庵・松岡小鶴・高場乱—』（『医譚』八七（二〇〇八年三月））

※その他『福崎町史』『林田郷土史』『播州大観』『兵庫県教育史』 山崎本多藩記念館所蔵資料等を参照した。

〈注〉

- 1 資料④松岡房夫『柳田国男と「約斎律詩」』に同様の指摘がある。
- 2 『小鶴女史詩稿』は約斎が写し残したものの。松岡鼎が一九二二年（大正一一）に編集刊行した『松岡小鶴女史遺稿』が別にある。
- 3 資料⑤参照
- 4 資料⑥参照
- 5 『福崎町史』四巻参照
- 6 『福崎町史』四巻参照
- 7 資料⑤参照
- 8 『福崎町史』二巻参照
- 9 資料⑥参照
- 10 資料⑥参照

- 11 資料⑤参照
- 12 資料⑥参照
- 13 資料⑥参照
- 14 資料⑥及び『福崎町史』第二巻「三木家好学の風」に蔵書目録も記載している。
- 15 資料⑥参照
- 16 『福崎町史』四巻「嗚呼我父母」参照。

○本稿は、二〇一四年九月十四日、九月二十日の敬業館講座、二〇一五年二月八日姫路市生涯学習大学校において発表したものに基づいている。

○平成26年度姫路獨協大学特別研究助成による研究である。

The Genealogy of “The Five Matsuoka Brothers” : Focusing on the Grandmother, Matsuoka Koduru

Midori YAMASAKI

The district of 播磨 “Harima” has been developing a cultural uniqueness from ancient times maintaining the strong link with the more advanced Kyoto culture. Its high cultural standard may be attributed to the works of those pursuing academic studies and teaching thus far in this area.

In particular, 松岡五兄弟 “the five Matsuoka brothers” are said to be the cultured men representative of 播磨 “Harima” culture. 松岡小鶴 “Matsuoka Koduru” is the grandmother of those five brothers that include 柳田国男 “Yanagida Kunio”, 松岡鼎 “Matsuoka kanae”, 井上通泰 “Inoue Michiyasu”, 松岡静雄 “Matsuoka Shizuo” and 松岡映丘 “Matsuoka Eikyu”. She has influenced deeply her son 約斎 “Yakusai”, and her grandsons, 松岡兄弟 “the Matsuoka brothers”. This paper is an introduction to her legacy to her grandsons through Chinese poetry.